

「人」と「物」をつなぐ対話 —2017年度博物館実習Ⅰから—

橋本 唯子

はじめに

「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどる」、学芸員はこのように博物館法によって定義づけられている。学芸員は資料という「物」を取り扱い、それを今もしくは未来の「人」へとつなげる仕事を担っている。すなわち学芸員の職務とは、「人」と対話し、また「物」と対話するものだと言言することもできよう。

本学では、全学部が取得可能な教養科目「ミュージアム科目」として、学芸員資格取得のための科目を開講している。博物館実習は1996年の博物館法改正にともなって、「博物館実習の一層効果的な実施を図るため、大学における博物館実習に係る事前及び事後の指導の1単位を含む3単位が必修」となった¹。このうち大学における実習（学内実習）を本学では「博物館実習Ⅰ」として開講している。

本稿では2017年度、博物館実習Ⅰにおける展示の実施にかかる関係者とのかわりどろと受講生の取り組み、それらが波及した効果について示す。それがとりもなおさず「人」と「物」にかかわる対話の一事例を示しているといえよう。

①-1 2017年度「博物館実習Ⅰ」にかかる経緯

2017年11月、本学企画課広報室より、総本家駿河屋（以下駿河屋と略す）の新しい本社工場（以下本社工場と略す）に設置する展示コーナーにかかる協力についての相談を受けたという連絡を得たのが端緒である。この時、後期授業において既に受講生が「和歌山の「食」」をテーマとした展示を開催することを決定していたが、内容は未定であったこともあり、駿河屋を主眼としたテーマへの変更を打診したところ、受講生の手承を得て構想を始めた。

ただし、学生は素より筆者自身も駿河屋についてもしくは和菓子の歴史全般において浅学であり、駿河屋に助言を求めたところ、総務部長 河合正規氏による授業への同席が叶い、以後詳細なレクチャーを得ることができた。

総本家駿河屋は室町期に端を発し、
初代紀州藩主 徳川頼宣よりのぶが好んだこと



から御用菓子司として徳川家と深いかわりを持ち、和歌山に根づいた菓子文化を支える老舗である。特に10代藩主^{はるとみ} 治宝の時代に使われた菓子木型は、それを中心とした特別展が開催されるなど、資料的価値の高さが評価されている²。

「博物館実習Ⅰ」における展示は、駿河屋の歴史を紹介し、あわせて駿河屋が和歌山にとってどのような存在であるかを解き明かすことを主眼として企画することとした。

①-2 展示の概要

「博物館実習Ⅰ」の展示を作成すると同時に、本社工場における展示コーナーへの発展的活用を目指すものとして、内容を検討することとした。展示タイトルを「食べよら・駿河屋～550年の歴史を味わう」（以下「食べよら」と略す）とし、その歴史と和歌山の和菓子文化について掘り下げることが主な目的とした。そのため、駿河屋にかかる文献もしくは和菓子の歴史全般に対する文献を確認し、またキーワード列挙・データベースなど可能な限り関連資料を調べることが糸口とした。特にデータベースから『大阪朝日新聞』には最古1879年3月の記事があること、また『小梅日記』に駿河屋をめぐる記述があることなどが判明した。また図書館の蔵書からも多くの参考文献を得た³。

学芸員にとって、調査研究は重要な職務である。特にインターネット上の情報は玉石混淆であり、何をどこまで調べるべきかという問いも寄せられたが、まずは網羅しそこから吟味（対話）することを重んじた。加えて河合氏・和歌山市立博物館から有益な資料情報が寄せられ、それらを集約して展示内容を深めていく作業を進めた。

25♦

②-1 物（資料）との対話 ① 有吉佐和子『紀ノ川』

ここでは「食べよら」で取りあげた、駿河屋にかかわる資料から抜粋して紹介する。まず、和歌山を代表する小説家 有吉佐和子の代表作の一つ『紀ノ川』（1959）である。有吉は和歌山市に生まれ、幼少期をバタビア（現ジャカルタ）で過ごしている。故郷への思いは、「私が強烈に歌舞伎と和歌山県にひきつけられたのは、私にとって描いていた日本というのは、そこにしかなかったということです⁴」という本人の言葉から鑑みることができる。『紀ノ川』は「紀ノ川の流れに託して描かれた家の興亡の歴史」、「過去の日本の女性の宿命」を示した作品とされていて⁵、中でも駿河屋の菓子は主人公 花の義弟夫婦、浩策とウメとのやりとりの中で以下のように表れる。

「ウメ、茶淹れよよ」/「はい」/「水屋簞笥の上の棚に駿河屋の羊羹あろがい。

あれ切って出し」/「はい」/ウメは、浩策が口をきくたびに飛び上って用を足

している。(略)「ウメ」/「はい」/「お前、わしが胃丈夫やないのに羊羹こない厚う切ってええと思うんか。羊羹喰うのに番茶で喉通ると思うんか」/「はい」/「はいやないで。え、どないやね」/「……はい」⁶

羊羹の扱いに不慣れなウメは、家柄の劣る女性であることが示されている。名家の次男に生まれた浩策の偏屈な性分と、それに抗うことのできない、浩策に引き取られるように嫁いだウメとの関係性を如実に示す小道具として、「駿河屋の羊羹」が使われていることがわかる。

②-2 物（資料）との対話 ② 片山哲

田辺出身の政治家 片山哲は、有吉同様生涯を和歌山で過ごしたわけではないためか、むしろ和歌山への特別な思いを抱いていたようである。虎屋が特集した「忘れられぬ故郷の味」に寄稿した片山は、次のように記している。

わたし きやうり わ かやまけん いうめい するがや やう 有名な 駿河屋 あち またかくべつ とく
私の郷里は和歌山県です。有名な駿河屋の羊かん饅頭の味は又格別です。特
に羊かんはなが ほぞん かくざとう かた おもしろ
に羊かんは長く保存しておく、角砂糖みたいに固くなるのが面白くそれが
いつでも舌の上に残つてゐるやうです。⁷

寄稿した先が虎屋であるにもかかわらず、同じく羊羹を製造する商売敵 駿河屋を評するとは、いかにも「権威性がない (略) いいかえれば大衆性であり、庶民性」があるとされた片山らしい実直さをみることができるといえよう⁸。

◆26

②-3 物（資料）との対話 ③ 「粗供養」をめぐるあれこれ

データベースの検索において、『大阪朝日新聞』中駿河屋に関する記述を確認したと既述したが、記事の詳細は以下の通りである。

『大阪朝日新聞』1879年3月5日付け記事（ルビママ）

○去一日淡路町二丁目薬種商日野九兵衛氏の息子六三郎/(廿一年)の葬式
ハ送り人凡六百余名にて天神橋通四丁目/より長柄村埋葬場まで続ありし
と又其送り人一人前に羊/羹一本宛を送るるゝに付前日駿河屋へ五百本詔
へられし/に同家も眼を眩して漸々に調へたる由近頃賑はしき葬式

葬儀のために羊羹を詔えたとある。授業中にこの記事について報告する中で、これが「粗供養」と呼ばれるものであることを河合氏から指摘された。「粗供養」とは、「葬式当日に会葬者が、焼香のあとでもらう」ものである⁹。

なおこの「粗供養」について改めて確認した後、葬儀後に駿河屋の菓子が配られる事例について調べたところ、次の資料を見出した。

恐らく頼宣は甘党であったのであろう。羊羹で有名な駿河屋をわざわざ連れて入国され、しかも苗字帯刀までを許していたというのだからその甘党ぶりは察するにあまりがある。駿河屋は、紀州のバックによって関西方面に牢固

とした根をはって、江戸の虎屋に比されており、終戦後は、ついに東京でも誰知らぬ者のない盛大さとなった。私の甘党も、不肖ながらこれだけは徳川の血をついでいるということができる。先代頼倫の葬儀のとき、駿河屋は、会葬者全部に自慢の羊カンを振まってくれた。¹⁰

著者は、徳川家16代当主 徳川頼貞である。先にみたように、駿河屋は徳川家御用菓子司であり、親密なかかわりは江戸後期まで明らかにみることができるが、明治以降の徳川家と駿河屋の関係性を示す資料は少ない。資料にしたがうならば、少なくとも頼倫^{よりみち}葬儀の時点までは両者の結びつきがあることがわかる。

②-4 物（資料）との対話 ④ 関連イベントの実施

ここまで資料のなかの駿河屋が、主として資料を書き残した記述者にとってどのような存在であるかをみてきた。すなわち対話する相手は資料を通した記述者を含むものであるが、資料そのものと対話する経験をみてみよう。

近年博物館においては、集客や博物館の活動に対する理解促進のため展示にあわせた関連イベントを多く企画している。「食べよら」では、「本ノ字饅頭」実演（2018年1月15日）と、和菓子作り体験（1月18日）を実施した。いずれも駿河屋からのご協力を得て実現した企画である。実演では事前準備分に急遽追加した660個を完売し（店頭では1個118円のところ、100円で販売）、体験にも24名の募集をはるかに上回る希望者が応募した結果となった。体験においては、山本隆幸製造部長の指導の下、参加者が真剣に取り組むようすが報道された¹¹。



「和菓子離れ」が叫ばれて久しい。菓子メーカーによるインターネット調査においても、実際に購入するのは洋菓子の方が多いとの回答が約6割という。購入しにくい理由は10代では「価格が高い」「かしこまった感じがする」の順であるとされる¹²。しかし実演で販売された、参勤交代の携行食ともいわれる伝統を持つ本ノ字饅頭は1個約100円、洋菓子と比較して高値とはいえない。お饅頭1個をわざわざお店に入って買うのは躊躇われるとしても、気軽かつ安価に購入する機会さえあれば、学生は買い求めるのである。すべてが見た目・イメージで決まるわけではないし、アンケート調査と実態が必ずしも一致するわけではないことも検討する必要があるだろう。これらを受講生が実際に目で見て理解したことも重要である。

③-1 人との対話① 学生

「物」との対話に続き、「人」との対話を確認する。先述の関連イベント同様、博物館では展示内容の理解を深める手段として、ギャラリートークや展示案内が行われる。展示準備はグループワークであり、受講生は各自役割を



分担しているが、ここでは来館者に対して全体的な案内を行った。口頭による説明には内容の把握が不可欠である。さらには来館者との「対話」、コミュニケーションが必要であり、さまざまな要素を必要とする場面となる。受講生には展示完了後一度案内をみせ、その後はすべて担当させていった。特に学芸員養成課程関連授業の受講生への展示案内（1月22日実施）において寄せられたりアクションは、案内した実習受講生にとっても大いに参考となるものであった¹³。

③-2 人との対話② 資料所蔵者

現在、駿河屋の資料は、主に駿河屋と和歌山市立博物館とに所蔵されている。最も展示準備にあたり時間を割いていただいたのが駿河屋河合氏であり、そのやりとりから多くの示唆を得たことは言を俟たない。前述「粗供養」をはじめ、文言の訂正や画像提供など微に入り細を穿つアドバイスをいただいたことは、受講生にとっても内容を推敲することの重要性を理解するまたとない機会となった。和歌山市立博物館からも同様に多くの助言を得ることができた。

③-3 人との対話③ 来館者

③-1で展示案内について記したが、来館者は学生ばかりではない。本展示は比較的多く報道に取りあげられたこともあり、問い合わせや反響も少なくなかった。一例として「小梅日記を楽しむ会」との応答について記す。展示パネルのうち「先人たちと駿河屋」という項目で、川合小梅が記した『小梅日記』中の駿河屋についての記述を掲載し、そこで駿河屋で製造された干菓子「小梅日記」の画像提供について依頼した。快諾いただき、また関係者が来場され、学生が案内することができた¹⁴。

それ以外にも、駿河屋は与謝野晶子と由縁があることが知られている。さかい利晶の杜からも画像提供と指導をいただく機会を得た。

④ その後の展開 駿河屋本社工場内覧会と南海電車によるイベント

「博物館実習Ⅰ」における展示内容を改変し、またデザインもレイアウトも一新して、本社工場における展示パネルが完成した。2018年5月、オープンに先駆けた内覧会では、受講生が関係者にパネル内容を案内した¹⁵。

また10月14日、南海電鉄が主催したイベント「紀州の和菓子文化まるごと堪能」において、本社工場見学などが組み込まれ、受講生による案内が行われた¹⁶。

このようにひとつの展示を通じて後日関連イベントが開催されるなど、波及効果を確認することができたことも成果といえよう。

おわりに

対話とは、「向かい合って話し合うこと。また、その話。」(『デジタル大辞泉』)である。対話により発見されることや相乗効果を考えたとき、対象と「向かい合う」ことは重要である。

授業最終回に整理した課題としては、パネルの字が小さいこと、内容をコンパクトに集約すべきだったこと、関連イベントが目立ちすぎ展示への導線が不十分だったことなどである。これらは受講生が経験して初めて理解できることであり、今後に活かすべきであろう。また「地域に住んでいる人それぞれの駿河屋に対する思い出を聞くことができた」「学生よりも詳しく熟知している人にも説明できるよう勉強しておけばよかった」といった声もあり、学芸員が勤務を通して痛感する点を理解したことは極めて実践的であり、感慨深い。なお、学外の来館者から誤字の指摘を受け、修正と謝罪を行ったことも記述しておきたい。加えて来館者からメッセージを得たことは注を参照願いたい¹⁷。

現在の学芸員資格制度が抱える課題は既に各方面から指摘されている。主な点は資格取得者に対する学芸員採用者の受け皿の少なさや、実施される授業内容と実際の職務との乖離である。それらを是正する一途として博物館法の改正が実施されたが、有効な解決策たり得ていないといった批判も多い。いずれも早期解決は困難であるが、受講生が「人」と、また「物」と真摯に向き合い、自らの力で学んだ経験は、たとえ学芸員にならなかったとしても、重要なものであるに違いない。

今回の実習において総本家駿河屋には多大なご協力をいただいたことに深謝申し上げますとともに、担当された河合氏が折に触れて知識・経験・駿河屋への揺るぎない思いを吐露してくださったことが、三年生、就職活動を控えていた受講生にさまざまな示唆を与えたことを改めて記しておきたい。多くの感情を抱えながら勤務する一社会人の背中をみることで、これが何よりのキャリア教育といえるのではないだろうか。

最後に、今回のテーマを改めて整理したい。金沢や仙台など、全国に御用菓子司として藩と深いかかわりを持つ老舗は少なくない。中でもわざわざ藩主の転封にあわせて召し連れられた駿河屋と紀州徳川家との由縁の根拠を、単に藩主が甘党であったからとするのはあまりに浅慮であろう。本ノ字饅頭が携行食、非常時の栄養補給食品すなわち軍用食のひとつであったことは、この謎を解く鍵ではないだろうか。いずれにせよ引き続き新たな資料の発掘を試みたい。

今回の展示にあたって、関係者からのご尽力に対して改めてこの場を借りて御礼申し上げます。

¹ 「博物館法ガイドライン」（文部科学省、2009年4月）

² 和歌山市立博物館において開催された特別展「美尽し善極める―駿河屋の菓子木型―」（2017年7月22日～8月27日）、詳細は和歌山市立博物館編同上図録を参照。

³ 鈴木裕範『紀州の和菓子 その文化とまちづくり』（和歌山リビング新聞社、2012）、同『和歌山県内の3城下町における和菓子文化の研究～地域文化としての和菓子文化の再評価とまちづくり～』（和歌山大学経済研究所、2010）など。なお鈴木氏には資料の所在などについて多くの示唆を得た。

⁴ 川端康成ほか『対談日本の文学』（中央公論社、1971）

⁵ 藤沢全「有吉佐和子『紀ノ川』の花」（『国文学解釈と教材の研究』25-4所収）など。

⁶ 有吉佐和子『紀ノ川』（新潮社、1989）

⁷ 『お菓子たより』4（虎屋、1939）、本文ルビママ。

⁸ 片山内閣記録刊行会編『片山内閣：片山哲と戦後の政治』（片山哲記念財団片山内閣記録刊行会、1980）

⁹ 五来重『五来重著作集 第十一巻』（法蔵館、2009）

¹⁰ 徳川頼貞遺稿刊行会編『頼貞随想』（河出書房、1956）

¹¹ 和歌山放送2018年1月18日付けラジオサイト（<https://wbs.co.jp/news/2018/01/18/114215.html>、〔参照日：2019年1月3日〕）など。以下記事から一部を引用する。

デニムのパンツと雪駄（せった）に白足袋（しろたび）という和洋折衷のユニークな出で立ちで参加した、経済学部4年の西川大智（にしかわ・だいち）さんは「和菓子作りはなかなか経験出来ないと思い、すぐに参加を申し込みました。機械が作っていると思っていましたが、職人の手作りの技に感動しました。へらを使ってサクラの5枚の花びらをきれいに作るのが難しかったです」と感想を話していました。

¹² 「「和菓子離れ、中高年も、民間調査、「買うなら洋菓子」優勢、「コーヒー・紅茶に合わない）」、（『日本経済新聞』2017年5月26日付け記事）より。

¹³ 学生による記述の一部を引用する。

博物館実習の方による駿河屋の展示は、パネルのデザインや内容、菓子型などが適切に配置され構成されていた。以前、和歌山市立博物館で駿河屋の菓子型の展示を見学したことがあったが、より駿河屋の歴史や和菓子についての知識が深まり、興味をさらに持った。自身が博物館実習を受けるときどのようにすればよいのか、どのようにパネルを作成すれば見やすいかなど色々なことが勉強になった。前知識がなくとも充分に理解しやすく、コラムなどで楽しめるようになっている点は今後の学習で役立たい仕組みだった。また実際に展示を企画された方が学芸員の方がやるようなミュージアムトークのようなことをされていたことに驚いた。口頭であるにも関わらず展示内容をダイジェストにしてわかりやすく説明するようすをみて駿河屋の研究をきちんとされているという印象を受けた。個人的にわかりやすいと思ったのは駿河屋の歴史を図で簡単に説明しているパネルである。単なる年表

ではなく写真や色味もこだわっていて見やすくなっていた。また昔の新聞記事も駿河屋がどのような和菓子屋であるかを知ることができ興味深かった。シンボルゾーンでまんじゅうを売っていたのも展示とあわせて展示に興味を持ってもらうことに効果的と思った。

¹⁴ 小梅日記を楽しむ会ブログ（「1月例会の報告です。」、2018年1月31日付け、<https://koumesan1804.jimdo.com/2018/01/31/1%E6%9C%88%E4%BE%8B%E4%BC%9A%E3%81%AE%E5%A0%B1%E5%91%8A%E3%81%A7%E3%81%99/>〔参照日：2019年1月14日〕）

¹⁵ 「和菓子の魅力届ける」（『読売新聞』2018年5月15日付け記事）など。

¹⁶ 「紀州の和菓子文化を堪能」（『毎日新聞』2018年9月26日付記事）に掲載。

¹⁷ 来館者から後日メール受信したりアクションより抜粋、「学生さんたちには、とても丁寧に解説していただき、内容はもとより熱心に取り組んでこられた様子がひしひしと伝わってきて、和歌山人の我々はとても嬉しく思いました。」